

## (翻訳) 魯迅『雑草』

秋吉, 收  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7151749>

---

出版情報 : 言語科学. 47, pp.11-28, 2012-03-22. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会  
バージョン :  
権利関係 :

## (翻訳) 魯迅『雑草』<sup>1</sup>

秋吉 收 (Shu AKIYOSHI)

### 【序】

「芸術的完成さでは魯迅のあらゆる作品中で第一位を占める」。竹内好の言葉に象徴される高い評価とも相俟って、魯迅の散文詩集『野草 (Ye-cao)』の日本語への翻訳は、次に挙げるように、現在に至るまでかなりの数に上る。

- ・花栗実郎訳『野草』(抄訳4篇) (1928年、朝鮮及満州社(朝鮮京城)発行『朝鮮及満州』第247号所収「支那現代の小説」)
- ・鹿地亘訳『野草』 (1937年、改造社刊『大魯迅全集』所収)
- ・土井彦一郎訳『野草』(抄訳1篇) (1939年、白水社刊『西湖の夜—白話文学二十講—』所収)
- ・小田嶽夫訳『野草』(抄訳7篇) (1953年、青木書店刊〈文庫〉『魯迅選集 創作集1』所収)
- ・竹内好訳『野草』 (1953年、筑摩書房刊『魯迅作品集』所収)
- ・木山英雄訳『野草』(抄訳11篇) (1963年、平凡社刊『中国現代文学選集第二卷 魯迅集』所収)
- ・高橋和己訳『野草』 (1967年、中央公論社刊『世界の文学47 魯迅』所収)
- ・駒田信二訳『野草』 (1978年、集英社刊『集英社版世界文学全集72 魯迅 巴金』所収)
- ・竹内好訳『野草』(改訳) (1980年、岩波書店刊〈文庫〉『野草』)
- ・飯倉照平訳『野草』 (1985年、学習研究社刊『魯迅全集 第三巻』所収)
- ・山田野理夫訳『野草』(抄訳2篇) (1986年、岩崎書店刊『愛と真実の人びと4 魯迅—中国の夜明けを』所収)
- ・片山智行訳『魯迅「野草」全訳』 (1991年、平凡社刊〈東洋文庫〉)
- ・丸尾常喜訳『魯迅『野草』の研究』 (1996年、汲古書院)

表題『野草 (Ye-cao)』については、そのどれもが中国語の原題『野草 (Ye-cao)』をそのまま日本語訳としている。また散文詩集『野草 (Ye-cao)』以外にも、魯迅は著述の中で「野草 (Ye-cao)」を何度か口にしているが、それらの日本語訳も概ね、やはりそのまま「野草」とされてきた。だが、中国語と日本語の“野草”はかなり異なる意味を含んでおり、実際に、魯迅や周作人は与謝野晶子や武者小路実篤の詩、菊池寛の小説等の翻訳において、日本語の「雑草」を中国語の「野草」と翻訳している事実は、極めて注目される。今回の翻訳に当たっては、そうした観点から論じた筆者の

<sup>1</sup> 原題『野草』(1927年7月、北新書局刊)。散文(詩)集。

拙稿<sup>2</sup>などにに基づき、「野草」に代わる日本語訳として新たに「雑草」を提起する。

魯迅の「野草 (Ye-cao)」は、従来、著者魯迅のイメージに重ねられるかのように、高潔で凜とした日本語「野草」のイメージで捉えられてきた感がある。だが、魯迅自身の意識の中には、与謝野や武者小路の「雑草」に見えるようなもっとギラギラした、薄汚い、不格好な「雑草」のイメージが付与されていたと考える。「阿Q」に代表される魯迅の農村小説の主人公達は「野草」と言うよりまさに「雑草」であった。魯迅の暖かい眼差しは、当時の戦乱と貧しい生活に翻弄されて、田んぼでむやみに抜かれてしまうようにいつでも闇に葬り去られる民衆へと向けられていた。社会の底辺を生きるこれら「民草」は、地獄のような現実の中にあってもそれでも力強く生をかちとっていた。

このような視点は、従来においてどちらかと言えば『野草 (Ye-cao)』研究よりも魯迅の「小説」研究の中で強調されてきた。だが、中国語「野草 (Ye-cao)」を日本語「雑草」と改訳する可能性を提示することによって、散文詩集『野草 (Ye-cao)』をさらに広がりを持った作品として新たに問い直すことが出来るのではないかと考えている。

今回、日本語訳タイトル『雑草』のもと、全面的な新訳を試みる所以である。

注釈については、上記の既訳や『魯迅全集』、孫玉石氏を始めとする中国の数多の『野草 (Ye-cao)』研究の蓄積があり、ここに一々は挙げていない。新注を提示することも含めて今後の課題としたい。

なお、『野草 (Ye-cao)』は、冒頭の「題辞」を含めて24篇から成るが、紙幅の関係で、今回はそのちょうど半分の12篇を掲げた。参考まで、全篇の原題は次の通り。

「題辞」「秋夜」「影的告别」「求乞者」「我的失恋」「復仇」「復仇 (其二)」「希望」「雪」「風箏」「好的故事」「過客」(以上本稿)「死火」「狗的駁詰」「失掉的好地獄」「墓碣文」「頹敗線的顫動」「立論」「死後」「這樣的戰士」「聰明人和 子和奴才」「臘葉」「淡淡的血痕中」「一覺」。

## 【翻訳】

### 題 辞

沈黙しているとき、わたしは充実を覚える。口を開こうとすると、わたしは同時に空虚を感じる。

過ぎ去った生命はすでに死に絶えた。わたしはこの死に絶えたことに対して大いなる歓喜を有する。なぜならわたしはそれによってそれがかつて存在していたことを知るから。死に絶えた生命はすでに腐れ果てた。わたしはこの腐れ果てたことに対して大いなる歓喜を有する、なぜならわたしはそれがなお空虚でないことを知るから。

生命の泥は地面に棄てられ、喬木を生ぜず、ただ雑草を生ずるのみ。これは、わたしの罪過である。

雑草は、根は深くなく、花も葉も美しくない、だが露を吸い、水を吸い、古い死人の血と肉とを

<sup>2</sup> 「『野草』と『雑草』—魯迅の散文詩集『野草 (Ye-cao)』翻訳試論」(『現代中国』第71号 191~199頁 日本現代中国学会 1997年) など。

吸い、それぞれにその生存を奪いとる。生きている時にはやはり踏みにじられるだろう、刈り払われるだろう、死に絶えて腐り果てるまでは。

だがわたしは、心おおらかであり、心たのしい。わたしはおおいに笑うだろう、わたしは歌をうたうだろう。

わたしは自ら私の雑草を愛するが、しかし雑草でもって飾りとなすこの地面を憎む。

地底の火は地下をめぐり行き、奔りおどる。溶岩がひとたび噴き出すと、一切の雑草と、喬木とを焼き尽くす、かくして腐れ果つことすらかなわない。

だがわたしは、心おおらかであり、心たのしい。わたしはおおいに笑うだろう、わたしは歌をうたうだろう。

天地がかくも静寂であるからには、わたしはおおいに笑いかつ歌をうたうことはできない。天地がたとえかくも静寂でなくても、あるいはできないかもしれない。わたしはこのひとむらの雑草でもって、明と暗、生と死、過去と未来の境にあつて、友人と仇敵、人間と野獣、愛する者と愛せざる者の前に捧げて証とする。

わたし自身のために、友人と仇敵、人間と野獣、愛する者と愛せざる者のために、わたしはこの雑草の死滅と腐敗とが速やかに来らんことを希望する。さもなければ、わたしはいまだ生存していないことになる、それはまことに死滅と腐敗よりも不幸である。

去れ、雑草よ、わが題辞とともに！

1927年4月26日、広州の白雲楼にて魯迅記す。

## 秋の夜

わたしの裏庭から、土塀の外に樹が二本生えているのが見える。一本は棗の樹で、もう一本も棗の樹である。

その真上の夜空は、不気味で高い、わたしは日頃こんなに不気味で高い大空を見たことはない。かれはまるで人間世界を離れ去り、ひとびとが仰いでももう見えないようにしたいかのようだ。だがいまはかえって非常な青さで、きらきらと数十個の星の眼を、冷ややかな眼を瞬かせている。

かれの口もとには頬笑みがあらわれ、自分ではなほだ意味ありげに、繁き霜をわたしの庭の野の草花にそそいでいる。

わたしはそれらの草花がほんとうはなんという名なのか、ひとびとはかれらをどのような名で呼んでいるのか知らない。わたしはそれが極く小さなピンクの花を咲かせたのを覚えている、いまも咲いているが、さらに細く小さくなった、彼女は冷ややかな夜気のなかで、身を掬めるようにして夢をみる、春の到来を夢み、秋の到来を夢み、瘦せた詩人が涙を彼女の最後の花びらに塗りつけ、秋がたとえ来ても、冬がたとえ来ても、その後やって来るのはやはり春で、蝶が乱れ飛び、蜜蜂はみな春の歌を唱い始めるのだと彼女に告げる夢をみる。彼女はそこで頬笑む、その色は凍えて赤く痛ましく、なおも身を窄めたままではあるが。

棗の樹、かれらの葉はほとんど落ち尽した。以前には、他のものが叩き残した棗の実を打ち落と

しに来る二、三人のこどもがまだいたが、いまではもはやひとつも残っていない、葉さえも落ち尽した。かれは小さなピンクの花の夢を知っている、秋の後には春が必要だと。かれは落葉の夢をも知っている、春の後にはやはり秋だと。かれはほとんど葉を落とし尽し、ただ幹だけ残している、だが初めの枝じゅうが実と葉でいっぱいだった頃の孤形を脱して、ここちよげに背伸びをしている。しかし、幾本かの枝はなおも低れたままで、かれらが棗打ちの竿の先で受けた皮膚の傷を覆い守っている、だがまっすぐに伸びたいちばん長い幾本かの枝とはといえば、不気味で高い大空をすでに黙々と鉄のように突き刺し、大空をきらきらとひどく瞬かせている。大空の真ん丸い月を突き刺し、月を当惑して青ざめさせている。

ひどく瞬いている大空はますます非常な青さになり、不安になり、人間世界を離れ、棗の樹を避けたがっているようだ、ただ月だけを後に残して。だが月もひそかに東のあたりに逃げて行った。こうして何ひとつない幹は、不気味で高い空を相変わらず黙々と鉄のように突き刺し、ひたむきにその死命を制しようとする、それがどんなに多くの魅惑的な眼を瞬かせようとも。

ギャアとひと声、夜遊の悪鳥が飛び去った。

わたしは突如夜半の笑い声を耳にする、クックッと、眠りについたひとを驚かせたくないようだ、だが周囲の空気はことごとく笑い声に呼応している。夜半、他には誰もいない、わたしはすぐさまこの声は自分の口に発することを聞きつけ、わたしもすぐにこの笑い声に追いたてられて、自分の部屋にもどる。ランプの芯もただちにわたしに捲き上げられる。

背後の窓ガラスにトントンと音がして、なおも多くの小さな翅もつ虫がやたらにぶつかる。やがて、何匹かが、恐らく窓紙の破れ穴からだろう、這入って来た。かれらは這入って来ると、またもガラスの火屋にぶつかってトントンと音をたてる。一匹が上の方からとび込んだ、かれはそこで火に会う、しかもわたしはこの火を本物だと思う。二、三匹はランプの紙の笠の上に休んで喘いでいる。その笠は昨夜取り換えたばかりの笠で、真っ白い紙に、波形の折り目を付け、片隅には緋紅色のくまじ櫃子がひとつ描かれている。

緋紅色の櫃子が花咲くとき、棗の樹はまたも小さなピンクの花の夢をみるだろう、青々と弓なりの枝をいっぱい張って……。わたしはまたも夜半の笑い声を耳にする。わたしはいそぎ雑念を断ち切って、いつまでも白い紙の笠の上にいるその小さな青い虫を見る、頭が大きく尾が小さく、向日葵の種子に似て、ただ小麦半粒の大きさしかない、からだ全体の色は深い緑で愛らしく、可憐である。

わたしは欠伸をし、巻きたばこに火を点け、煙を吐き出して、ランプに向かい謹んで黙々と吊う、深い緑色の精巧な英雄たちを。

1924年9月15日。

## 影のいとまごい

ひとが時を覚えぬほど眠りに墜ちるとき、きまって影がやって来ていとまを乞い、こんな話をする――

わたしの意に添わぬものが天国にあるのなら、わたしは行きたくない。わたしの意に添わぬものが地獄にあるのなら、わたしは行きたくない。わたしの意に添わぬものがきみたちの未来の黄金世界にあるのなら、わたしは行きたくない。

だけどきみこそわたしの意に添わぬものだ。

友よ、わたしはもはやきみについて行きたくない、わたしは留まりたくない。

わたしは嫌だ！

ああ、ああ、わたしは嫌だ、わたしは道なきところを彷徨するほうがよい。

わたしはひとつの影に過ぎぬ、きみと別れて暗黒のなかに沈むのだ。だけど暗黒がまたもわたしを呑み込むだろう、だけど光明がまたもわたしを消し去るだろう。

だけどわたしは明と暗の狭間を彷徨したくない、わたしは暗黒のなかに沈むほうがよい。

だけどわたしは結局は明と暗の狭間を彷徨する、わたしには黄昏であるのかそれとも黎明であるのか解らぬ。わたしはしばらくうす黒い手を挙げ一杯の酒を飲み乾すふりをして、時を覚えぬときに独りで遠くへ行くのだ。

ああ、ああ、もしも黄昏ならば、暗夜が当然やって来てわたしを沈めるだろう、さもなければわたしは白日によって消されてしまうだろう、もしも現在が黎明であるならば。

友よ、時は近づいた。

わたしは暗黒のなかへ向け道なきところを彷徨するのだ。

きみはなおわたしの贈り物を願う。わたしがきみに何を献げよう？ 如何ともしがたい、ただやはり暗黒と虚無のみだ。しかし、わたしはただ暗黒だけが、あるいはきみの白日に消されてしまうことを願う。わたしはただ虚空だけが、けっしてきみの心を占有しないことを願う。

わたしはかく願う、友よ――

わたしは独りで遠く行く、きみがいないだけでなく、さらに他の影もない暗黒のなかに。わたしだけが暗黒に沈められ、かの世界はすべてわたし自身に属するのだ。

1924年9月24日。

## 乞食

わたしは剥げ落ちた高い塀に沿って道を歩く、柔らかい土埃を踏みながら。他にも何人かいて、それぞれ道を歩いている。微風が吹き、塀の上に突き出た高い樹の枝が、まだ枯れぬ葉をつけたまま、わたしの頭上で揺れている。

微風が吹くと、四方はみな土埃である。

ひとりのこどもがわたしに物乞いをする。袷を着て、悲しそうには見えないのに、通せんぼをして頭を地面に擦りつけ、追いつがって哀しげに喚く。

わたしはかれの声色と態度とが嫌いだ。わたしはかれがべつに哀しくもないのにそれらしく振る舞うのが憎い。わたしはかれのあの追いつがって哀しげに喚くのが嫌いだ。

わたしは道を歩く。他にもそれぞれ道を歩く何人かがいる。微風が吹くと、四方はみな土埃である。

ひとりのこどもがわたしに物乞いをする。袷を着て、悲しそうには見えない、しかしものが言えず、手を広げ、手振りをする。

わたしはただかれのあの手振りが憎い。そのうえ、かれはもしかすると決してものが言えないのでなく、これはただ物乞いの手口かも知れぬ。

わたしは施しをしない。わたしには慈善心はない、わたしはただ慈善家の上において、嫌悪と、疑惑と、憎悪とを与えてやるだけだ。

わたしは崩れた土塀に沿って道を歩く。割れた煉瓦が塀の欠けたところに詰めてあり、塀の内側にはなにもない。微風が吹き、秋の冷たさがわたしの袷へ浸み通る。四方はみな土埃である。

わたしは自分がどんな方法で物乞いをするかを思い浮かべる。声を出すには、どんな声色で？ ものが言えない振りをするには、どんな手振りで？・・・

他にもそれぞれ道を歩く何人かがいる。

わたしは施しを得られず、慈善心をも得られぬだろう。わたしは慈善家の上に住ると自認する者の嫌悪と、疑惑と、憎悪とを得るだろう。

わたしは無為と沈黙とで物乞いするだろう・・・

わたしは少なくとも虚無を得るだろう。

微風が吹くと、四方はみな土埃である。他にもそれぞれ道を歩く何人かがいる。

土埃、土埃、・・・

・・・・・・・・・・

土埃・・・

1924年9月24日。

## ぼくの失恋

### —古えになぞらえた新しい戯れ歌

ぼくのいとしいひとは 山の中腹にいる、  
尋ねて往きたいけれど 山があまりにも高い、  
仕方なく首うなだれると 涙で長着はしとど。  
いとしいひとが給れたのは 乱舞する蝶のハンカチ、  
あのひとへのお返しになにを ふくろうを。  
あれからむくれて ぼくを構うてくれはせぬ、

なぜか解らず ぼくのこころを落ち着かせぬ。

ぼくのいとしいひとは 賑わいの街にいる、  
尋ねて往きたいけれど 人がひしめき合っている、  
仕方なく上を仰ぐと 涙で耳はうるおう。  
いとしいひとが給れたのは 二羽の燕の絵、  
あのひとへのお返しになにを さんごしの砂糖菓子。  
あれからむくれて ぼくを構うてくれはせぬ、  
なぜか解らず ぼくの頭をうつろにさせる。

ぼくのいとしいひとは 河のそばにいる、  
尋ねて往きたいけれど 河が深すぎる、  
仕方なく首をかしげると 涙で襟もしとど。  
いとしいひとが給れたのは 懐中時計の金鎖、  
あのひとへのお返しになにを アスピリンを。  
あれからむくれて ぼくを構うてくれはせぬ、  
なぜか解らず ぼくの神経を衰弱させる。

ぼくのいとしいひとは 大邸宅にいる、  
尋ねて往きたいけれど 車をもたぬ、  
仕方なく首を振ると 涙はまるで麻のよう。  
いとしいひとが給れたのは バラの花、  
あのひとへのお返しになにを 赤<sup>ま</sup>棟<sup>がし</sup>蛇を。  
あれからむくれて ぼくを構うてくれはせぬ、  
なぜか解らず——彼女に聞いてくれ。

1924年10月3日

## 復 讐

人間の皮膚の厚さは恐らく五厘にも満たず、鮮紅色の熱い血が、ただその内側をめぐっていて、びっしりと塀の上を這う尺取り虫よりもっと詰まった血管のなかを奔流して温かな熱を発散する。かくてそれぞれがこの温かな熱でもってたがいに魅惑し、煽動し、牽引し、そして寄り添い、接吻し、抱擁することを懸命に願い、生命の快い大歓喜を得る。

しかしもし一本の鋭利な匕首で、ただひと突き、このピンク色の、薄い皮膚を突き刺せば、かの鮮紅色の熱い血がすばやい矢のように、すべての温かな熱でもって、まともに殺戮者へ注ぎかかるのを眼にするだろう。ついで、氷のように冷たい呼吸を与え、青ざめた唇を示して、人の本性を茫

然とさせ、生命の飛躍する最高の大歓喜を得させる。しかしてそれ自身は、そこでいつまでも生命の飛躍する最高の大歓喜のなかに浸る。

かかるが故に、かれら二人がいて全身を裸にし、鋭利な匕首を掴み、広漠たる曠野に向かい合っ  
て立つ。

かれら二人は、抱擁せんとし、殺戮せんとする・・・

路行くひとびとが四方から奔り集い、びっしりと、尺取り虫が塀を爬うように、蟻たちが目刺し  
の頭を担うように。着ている物はどれもみごとだが、手はなにも持たぬ。しかし四方から奔り集っ  
て来、しかも懸命に首を伸ばし、この抱擁あるいは殺戮を鑑賞しようとする。かれらはすでに事が  
果てて後自分の舌に載せる汗あるいは血の新鮮な味を、あらかじめ感じている。

しかしかれら二人は向かい合って、広漠たる曠野に立ち、全身を裸にし、鋭利な匕首を掴んでい  
る。しかし抱擁もせず、殺戮もしない、しかも抱擁あるいは殺戮の意志をもつとも見えぬ。

かれら二人は、このようにして永久にまで至り、いきいきとした円やかな体はもはや枯渇しそう。  
しかし少しも抱擁あるいは殺戮の意志をもつとは見えぬ。

路行くひとびとはかくて退屈する。退屈がいてかれらの毛穴へ潜り込むと感じ、退屈がいてかれ  
ら自身の心のなかから毛穴を経て爬い出し、曠野いっぱい爬到溢れ、また他人の毛穴へ潜り込む  
と感ずる。かれらはかくて喉と舌の渇きを感じ、首も疲れはてる。ついには顔と顔とを見あわせて、  
そろりそろりと散ってゆく。さらには干からびて生活の面白味を失ってしまったことをはっきりと  
感ずるに至る。

かくてただ広漠たる曠野だけが取り残され、しかもかれら二人は、そこで全身を裸にし、鋭利な  
匕首を掴み、枯渇したまま立っている。死人のような眼光で、この路行くひとびとの枯渇と、血の  
流れぬ大殺戮とを鑑賞し、しかしていつまでも生命の飛躍する最高の大歓喜の中に浸る。

1924年12月20日。

## 復 讐 (その二)

かれはみずから神の子、イスラエルの王と思いついでいるために、十字架に釘打たれる。

兵士たちはかれに紫の衣を羽織らせ、いばらの冠を被せ、かれを呪い、さらに一本の葦でかれの  
頭をたたき、かれに唾吐きかけ、跪いてかれを拜む。からかいが終わると、かれのために紫の衣を  
剥ぎ取り、もとのようにかれ自身の衣服を着せた。

みよ、かれらがかれの頭をたたき、かれに唾吐きかけ、かれを拜むのを・・・

かれはかの役業で調合した酒を飲もうとしないで、イスラエルびとがいかにかれらの神の子をあ  
しらうかをはっきりと心ゆくまで味わい、かつよりながくかれらの前途を哀れもうとする、だがか  
れらの現在は憎む。

四方はすべて敵意である、哀れむべき、呪うべき。

カンカンと音をたてて、尖った釘が掌を突き通る、かれらはかれらの神の子を磔にしようとする。  
哀れむべきひとびとよ、かれを穏やかに痛ましめる。カンカンと音をたてて、尖った釘が足の甲を

突き通る、釘は一塊の骨を砕き、痛みは心の奥底までも届く、だがかれら自身かれらの神の子を磔にする、呪うべきひとびとよ、それはかれを快く痛ましめる。

十字架が打ち立てられた。かれは虚空に懸かっている。

かれはかの没薬で調合した酒を飲まなかった、イスラエルびとがいかにかれらの神の子をあしらうかをはっきりと心ゆくまで味わい、かつよりながくかれらの前途を哀れもうとする。だがかれらの現在は憎む。

路行くひとはみなかれを罵り、祭司長と学者もかれをからかい、かれとともに釘打たれているふたりの強盗までもかれをそしる。

みよ、かれとともに釘打たれている者を……

四方はすべて敵意である、哀れむべき、呪うべき。

かれは手足の痛みのうちに、哀れむべきひとびとの神の子を磔にしようとする悲しみと、哀れむべきひとびとが神の子を磔にしようとし、かつ神の子がいまにも磔にされようとする喜びとを心ゆくまで味わっている。突然、骨を砕くひどい痛みが心の奥底にまで届いた、かれはただちに大いなる喜びと大いなる哀れみのなかに深く浸る。

かれの腹部は波打って、哀れみと呪いの痛みの波。

地はあまねく暗黒に変わった。

「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」（訳すとつまり、わが神、わが神、おん身はいかで我を見棄て給えるの意味である）

神はかれを見棄てた、かれはついにやはりひとりの「ひとの子」であった。だがイスラエルびとは「ひとの子」さえも磔にした。

「ひとの子」を磔にしたひとびとの体は、「神の子」を磔にした者よりもいっそう血に汚れ、血なまぐさい。

1924年12月20日。

## 希望

わたしの心はことのほか寂しい。

しかしわたしの心はなほだ安らかである。愛憎もなく、哀楽もなく、色と音もない。

わたしは恐らく年老いたのだろう。わたしの頭髮がもう半ば白くなっているのが、なによりはっきりしている事ではないか。わたしの手が顫えているのが、なによりはっきりしている事ではないか。すると、わたしの魂の手もきつと顫えていて、頭髮もきつと半ば白くなっているはずだ。

しかしそれはずいぶん前からの事だ。

それ以前には、わたしの心にもかつて血なまぐさい歌声が満ちていた、血と鉄と、焰と毒と、和睦と仕返しと。だが突如としてこれらはすべて空虚となったが、ただ時としていかんともしがたい自己欺瞞の希望で意識的に埋めることもあった。希望、希望、この希望の盾で、あの空虚のなかの暗夜の襲来を防ぎ拒んだ、たとえ盾の背後も依然として空虚のなかの暗夜であるとしても。だがそ

うしたところで、ひき続きわが青春を磨り減らした。

わたしは早くからわが青春のすでに過ぎ去っていたのに気付いてなかったことなどあろうか？  
ただ身外の青春だけは確かに存在すると思っていた。星、月光、ぴくりとも動かぬ蝶、暗がりの花、  
ふくろうのいまわしい鳴き声、ホトトギスの血を吐く叫び、笑いの消えゆく響き、愛の翼打つ舞…。  
たとえうら悲しくもさだかならぬ青春だとしても、やはり青春である。

だが現在はなぜかくも寂しいのだろうか？ まさか身外の青春さえもみな過ぎ去り、世のわかもの  
たちまでも多くは老いさらばえたのであろうか？

わたしはやむなく自分でこの空虚のなかの暗夜と格闘する。希望の盾を手放すと、わたしはペト  
フィ・シャーンドル（1823～49）の「希望」の歌を耳にした。

希望とはなにか？ 遊女である。

彼女は誰をも惑わし、一切を献げる。

きみが夥しい宝を——きみの青春を——擲ってしまうと

とたんにきみを棄て去る。

この偉大な抒情詩人、ハンガリーの愛国者が、祖国のためにコサックの騎兵の槍先に倒れて、は  
やくも75年になる。悲しいかな死よ、だがもっと悲しむべきはかれの詩が現在に到るも死せぬこ  
とだ。

しかし、痛ましい人生よ！ 勇敢無敵なるペトフィの如きものさえ、ついに暗夜にむかって足を  
とどめ、涯知らぬ東のかたを顧みていた。かれは言う、

絶望の虚妄たるや、まさに希望と相等し。

もしもわたしがなおも明るからぬ暗からぬこの「虚妄」のなかに生を偷まねばならぬのならば、  
わたしはさらにあの過ぎ去ったうら悲しくもさだかならぬ青春を探し求めよう、わが身外に存在す  
るとしても構いはしない。身外の青春がもしもひとたび消え失せれば、わが身中の晩年もただちに  
凋んでしまうからだ。

だが現在は星と月光とはなく、ぴくりとも動かぬ蝶はむろん笑いの消えゆく響き、愛の翼うつ舞  
もない。しかしわかものたちははなはだ安らかである。

わたしはやむなく自分でこの空虚のなかの暗夜と格闘する、たとえ身外の青春を探し出せなくと  
も、どうしても自分でわが身中の晩年を擲たねばならぬ。しかし暗夜はいったいどこにあるのだろ  
うか？ 現在は星はなく、月光はむろん笑いの消えゆく響きと愛の翼うつ舞もない。わかものたち  
ははなはだ安らかで、だがわたしの前にはついに真の暗夜すらもない。

絶望の虚妄たるや、まさに希望と相等し！

1925年1月1日。

## 雪

暖国の雨は、いままで一度も冷たく硬くきらきらと輝く粉雪に変わったことはない。博識のひと  
びとはそれを単調と感ずるが、それ自身も不幸と思うかどうか？ 江南の雪は、だけど潤いがあつ

てとても艶やかである。それはまだ微かに息づいている青春の訪れであり、きわめてすこやかな処女の肌である。雪の野原には紅い宝珠つばきの花と、真白いなかに青みを潜めた一重咲きの梅の花、濃黄色の古代楽器磬びんの形をした臘梅の花がある。雪の下にはさらにかじかんだ緑の野草がある。蝶は確かにいない。蜜蜂がつばきの花と梅の花の蜜を採りに来るかどうかは、わたしの記憶にもはや定かではない。ただわたしの眼の前には冬の花が雪の野原に咲いていて、多くの蜜蜂たちが忙しそうに飛んでいて、ぶんぶんという唸りまでも聞こえてくるようだ。

こどもたちは凍えて真っ赤な、紅生薑みたいなちいさな手に息を吹きかけながら、七、八人が一緒になって雪だるま作りをする。うまくゆかないので、だれかの父親も手伝っている。だるまは忽ちこどもたちよりずっと高く仕上がる、ただ上は小さく下は大きい雪の塊りにすぎず、結局瓢箪かそれともだるまか見分けがつかない、だがとっても白くて、とっても艶やかで、自身の潤いでくつきあっていて、全体きらきらと輝きを放っている。こどもたちは竜眼の種でかれに目玉を入れてやり、だれかの母親の化粧匣のなかから紅を盗んで来て唇に塗りつける。これで確かにひとりのでかいだるまである。かれはそこで眼光をぎらつかせ唇を真っ赤にして雪の地面に坐っている。

次の日にも幾人かのこどもがかれを訪れる。かれに向かって手を叩き、頷き、笑いさんざめく。だがかれはとどのつまりはひとりで坐ったままである。晴れた日がかれの皮膚を融かし、凍てついた夜がかれに氷の覆いを被せ、融けて透明の水晶のようになる。ひき続く晴れた日にはさらにかれを何とも言いようのないさまにさせる、こうして唇の紅も色褪せてしまう。

しかしながら、北方の空を舞う粉雪は、舞い降りてからも、いつまでも粉の如く、砂の如く、それらは決して粘つかない、屋根の上に、地面の上に、枯れた草の上に、ただそのように撒き散らされるだけ。屋根の上の雪は、家のなかに住むひとの火の温もりによって、とっくに融けてしまうものもある。他のは、晴れた空の下、旋風が突如やって来ると、勢いよく舞い上がり、日の光のなかできらきらと輝きを放ち、焰を包み込んだ濃霧のように、旋回しては舞い上がり、大空に果てしなく拡がり、大空を旋回させかつ舞い上がってきらめき輝かせる。

涯のない曠野の上、凜冽たる天空の下、きらきらと旋回し舞い上がっているのは雨の精霊……  
そう、それは孤独な雪である、死に絶えた雨である、雨の精霊である。

1925年、1月18日。

## 凧

北京の冬、地面にはなお積雪が残り、うす黒いはだかの樹々の枝が晴れわたった空に交叉し、遙か彼方には凧が一つ二つ揚がっているが、それはわたしにとってある種の戸惑いと哀しみである。

故郷の凧の季節は、春二月である。ビューンという唸りを聞きつけて見上げると、薄墨色の蟹凧かあるいはさみどり色の蜈蚣むかひ凧を眼にすることができる。他にも寂しい瓦凧があるが、唸りはなし、揚がり方もはなはだ低く、ひとりぼっちでしょんぼりと可憐な様子に見える。だがこの頃には地上の楊柳はもう芽を吹き、早咲きの花桃も多くは蕾を綻ばせていて、こどもたちの空の飾りものと呼応し合って、いちめん春の暖かさを編みあげている。わたしはいまどこにいるのだろうか？

四方はみななおひどい冬の厳しさである、だが久しく別れている故郷の久しく過ぎ去った春は、意外にもこの空のなかにただよいあらわれてくる。

だけどわたしはもともと凧揚げが好きではない。好きでないだけでなく、それが嫌いだった。わたしはそれを見込みのないこどものする遊びだと思っていたからである。わたしと正反対なのがわたしの下の弟で、かれはその頃たぶん十歳そこそこだっただろうが、病気がちで、堪えられないほど痩せていた、しかし凧が大好きだった、自分では買えないし、わたしも揚げさせないので、かれはやむなく小さな口を開けたまま、ぽかんと空を凝視してうっとり、ときには小半日もそうしていた。遙か彼方の蟹凧が突如墜落してくると、かれは驚きの声をあげた。二つの瓦凧のもつれが解けると、かれは喜んでとび跳ねた。かれのこうした仕草は、わたしの目にはすべて笑いもので卑しむべきものであった。

ある日、わたしはふと気付いた、何日もかれをあまり見かけないようだ、ただつい先頃かれが裏庭で枯れた竹を拾っていたのを覚えている。わたしははっと悟った気がして、ひとが滅多に行かないがらくたを仕舞い込んでいる小屋へすぐに駆けていった。戸を開けると果たして埃を被った日用品の山のなかにかれを見つけた。大きな方形の腰掛けを前にして、小さな腰掛けに坐っていた。ひどく慌てて立ちあがり、色を失って竦んだ。大きな方形の腰掛けの傍に蝶凧の竹骨がひとつもたせかけてあり、まだ紙は糊付けされてない、腰掛けの上には目玉にする一对の小さな唸りが、ちょうど紅い細い紙で飾りつけられる最中で、もうすぐ完成するところであった。秘密を発いた満足さのなかで、かれがわたしの眼を欺き、見込みのないこどもの遊び道具をこんなに苦心惨憺してこっそりと拵えていたのをひどく憤った。わたしはやにわに手を伸ばして蝶の片方の羽の骨をへし折り、そのうえ唸りを地面に抛り投げ、踏み潰した。年齢でも腕ずくでも、かれはわたしの敵ではなかった。わたしは当然完全な勝利を得て、傲然と出ていった、かれが絶望して小屋のなかに突っ立っているのを留めたまま。そのあとかれがどうしたのか、わたしは知らないし、心にもとめなかった。

だがわたしへの罰はついに回ってきた。われわれのとてもながい離別の後で、わたしはすでに中年になっていた。わたしは不幸にも偶然一冊の児童のことを論じた外国の書物を読み、遊びは児童のもっとも正当な行為であり、玩具は児童の天使だとはじめて知った。そこで二十年このかたまったく思い起こしもしなかった幼年期の精神に対する虐殺的行為であるこの一件が、突如眼前に繰りひろげられ、そしてわたしの心もまるでいっぺんに鉛の塊りに変わったように、重く重く墜ちていった。

だが心は墜ちていくにとどまらずついに断ち切れてしまっても、重く重く墜ちに墜ちるばかりである。

わたしには過ちを償うすべもわかっている。かれに凧を与えてやり、かれが揚げるのに賛成し、かれに揚げるのを勧め、かれと一緒に凧揚げをする。われわれは大声をあげ、駆け回り、笑いあう。——だがかれはその時すでにわたしと同様、とっくに髭が生えていた。

わたしはいま一つ過ちを償うすべがあるのもわかっていた。かれに許しを乞い、「ぼくはでもちっともあなたを咎めていませんよ」とかれが言うのを待つのだ。そうすれば、わたしの心はきっとすぐ軽くなるだろう。これは確かに実行できる一つの方法だ。ある日、われわれが出会ったとき、顔にはどちらもすでに多くの「生」の苦しみの皺が刻み込まれていて、それにわたしの心ははなは

だ重かった。われわれの話題が次第にこどもの頃の思い出に入ったところで、わたしはこの一件を口に出して、自分で少年時代の愚かさを述べた。「ぼくはでもちっともあなたを咎めていませんよ」とかれがいまに口を開けば、わたしはただちに許されて、わたしの心はそれから軽くもなるだろうと思った。

「そんなことがありましたか？」かれは驚き訝るように笑いながら言った、まるで傍で他人の昔話を耳にしているかのように。かれはもはや何も記憶していなかった。

まったく忘れて少しも恨みのないものに、許すも許さぬもあるだろうか？ 恨みもないのに許すとすれば、それは嘘をつくことにすぎない。

わたしはこのうえに何を求めることができよう？ わたしの心はやむなく重く沈むばかり。

いま、故郷の春がまたもこの異郷の空に去来して、わたしに久しく過ぎ去ったこどもの頃の思い出を与えるが、同時に捉えようのない哀しみをも伴っている。わたしはいつそのもの寂しい厳冬のなかへと遁れる方がよいのだろう——しかし、四方は明らかに厳しい冬であり、まさにわたしに非常なる寒気の威力と冷氣とを与えている。

1925年1月24日。

### すばらしい物語

ランプの焰がだんだん小さくなって、石油がもう多くないことを知らせている。そのうえ石油が一流品でないので、早くも燻って火屋がとつても暗い。爆竹の響きはあたりにつけたたましく、たばこの煙は身辺に立ち籠めている。どんよりと暗い夜である。

わたしは眼を閉じて、背中を反らせて、椅子の背に凭れる。『初学記』を持つ手を膝の上に置く。朦朧としたなか、わたしは一篇のすばらしい物語を見る。

この物語はとつてもうつくしく、みやびやかで、たのしい。多くの美しい人々と美しい事どもが、入り交じって満天の錦雲のようで、さらに万顆の流星みたいに躍動していて、同時にまた拡散して、涯のない彼方へ去る。

わたしは以前小舟に乗って山陰道を通り過ぎたことをかすかに憶えている。兩岸の南京櫨<sup>はび</sup>、稲苗、野花、鶏、犬、森と枯樹、藁屋根、塔、伽藍、農民と農婦、村娘、乾してある衣服、和尚、蓑笠、空、雲、竹、・・・それらがすべて紺碧に澄んだ小河のなかに逆さに影を映し、櫂を動かすごとに、それぞれが閃く日光を取り込み、水中の浮き草や泳ぐ魚とともに揺れ動く。もろもろの影と形で、ときほぐれないものはなく、さらに揺らぎ、拡がり、たがいに解け合う。いま解け合ったばかりなのに、すぐまた縮んでもとの形に近づく。輪郭はみなぎざぎざで群がる夏の雲のように、日光に縁どりされて、水銀色の焰を噴き出す。およそわたしの通り過ぎた河は、どれもこうだった。

いまわたしの見ている物語もそのようだ。水中の青空の底は、あらゆる事物がみなその上で交錯して、一篇を織り成し、いつまでも生き生きとし、いつまでも拡がるので、わたしはこの物語の結末を見ることはできない。

岸辺の枯れた柳樹の下の幾株かの痩せ細った立葵は、きっと村娘が植えたのだろう。大きな紅い

花と斑な紅い花とが、みな水中で揺れ動くと、たちまち砕け散り、細長く伸びて、ひとすじごとが  
臙脂の水みたい、だが暈<sup>ぼや</sup>けてはいない。藁屋根、犬、塔、村娘、雲、・・・どれもみな揺れ動いて  
いる。大きな紅い花はどの一輪も細長く引っ張られ、そしてパシャッとなにかが飛び込む音ととも  
に、はじけて紅い錦の帯となる。帯は犬のなかに織り込まれ、犬は白い雲のなかに織り込まれ、白  
い雲は村娘のなかに織り込まれ・・・。一瞬にして、それらはまたすぐに縮んでしまう。だが斑  
な紅い花の影ももはや砕け散り、細長く伸びて、まもなく塔、村娘、犬、藁屋根、雲のなかに織り  
込まれる。

いまわたしの見ている物語は、次第に明瞭となって、うつくしく、みやびやかで、たのしく、し  
かも鮮やかである。青空の上には、数知れない美しい人々と美しい事どもがあつて、わたしはひと  
つひとつ眺め、そのひとつひとつに見覚えがある。

わたしがそれらを凝視しようとする・・・。

わたしがそれらをまさに凝視しようとしたとき、俄にはっとして、眼を開けると、錦雲もすでに  
収縮し、入り乱れ、さながら誰かが大きな石塊を河のなかへ投げ入れたかのように、水波がたちま  
ち立って、一篇のあらゆる影はこなごなに引き裂かれた。わたしは殆ど床に墜ちかけていた『初学  
記』を無意識に急いでしかと掴んだ。眼の前にはなおいくつかの虹色の砕けた影が残っている。

わたしはこの一篇のすばらしい物語を心から愛する。砕けた影のなお残っているうちに、それを  
呼び戻し、それを完成し、それを書き留めなくてはならぬ。わたしは本を抛り投げ、背のびをする  
と手を伸ばして筆をとる——いずこにひとすじの砕けた影などあるだろう、ただ暗いランプの光が  
眼に入るばかり、わたしは小舟のなかにはいない。

しかしながらわたしはこの一篇のすばらしい物語を見たことをいつまでも憶えている。どんより  
と暗い夜に・・・。

1925年2月24日。

## 旅 人

時間：ある日の黄昏。

場所：あるところ。

人物：老人——七十歳前後、白い髭と髪、黒い袴の長衣。

少女——十歳前後、赤茶けた髪に、真っ黒い瞳、白地に黒の格子縞の長衣。

旅人——三、四十歳位、身なりは草臥れているが屈強、眼光是暗く沈んでいて、黒い髭に、  
乱れた髪、黒くて短い上衣とズボンはみな破れ、裸足にぼろ靴を履き、脇の下方に袋を  
一つ掛け、背丈と同じ高さの竹の杖をついている。

東は、幾本かの雑木と瓦礫。西は、荒れはてた千人塚である。そのあいだにひとすじの路のよ  
うで路でない形跡が伸びている。泥造りの小さな家がこの形跡に面し、一枚の開き戸があいてい  
る。戸口の傍にひとつの枯れた木の切株がある。

(少女がちょうど木の切株に坐っている老人をたすけ起こそうとしている。)

老人 娘や、おい、娘や、なぜじっとしているのか？

少女 (東の方を眺めて、) 誰かやって来るわ、ちょっと見てみましょう。

老人 そのひとを見るには及ばぬ。わたしを連れて戻ってくれ。陽がもうすぐ沈むから。

少女 わたし、——ちょっと見てみるわ。

老人 やれやれ、おまえという娘は！ 毎日空を見、土を見、風を見ているのに、まだ見たりぬのか？ それよりも美しいものは何もないのに。おまえはただもう誰かを見たいばかり。陽が沈むころ現れるものが、おまえにどんなよいものをも持ってきてくれるはずはない。・・・やはり家に入ろう。

少女 でも、もうやって来たわ。あら、乞食だわ。

老人 乞食？ そんなはずはあるまい。

(旅人が東の方の雑木林のあいだからよろよろと歩いて来て、しばらくためらったあと、そろりそろりと老人に近づいてゆく。)

旅人 ご老人、今晚は。ご機嫌いかがですか？

老人 ああ、達者だよ、お蔭で。おまえさんは？

旅人 ご老人、まことに失礼ですが、おたくで水を一杯飲ませていただけませんか？ わたしは歩いて喉がとっても渇いています。このあたりにはひとつの池も、ひとつの水たまりもありません。

老人 うむ、いいとも。どうぞ掛けなされ。(少女へ向かって) 娘や、水を持って来なさい、コップはきれいに洗ってな。

(少女は黙って泥造りの家に入る。)

老人 旅のお方、どうぞお掛けなされ。してお名前は？

旅人 名前ですか？ ——わたしは知りません。わたしはもの心ついたころから、たったひとりです。わたしをもともとどう呼ぶのか知ってはいません。わたしは道中歩いていると、ときとしてひとさまは勝手にわたしを呼びます、いろいろと、わたしもはっきりと覚えていません、まして同じ名前を二度と聞いたことはありません。

老人 ああ。それでは、どこから来られたかね？

旅人 (ややためらって、) 知りません。わたしはもの心ついたころから、ただこのように歩いています。

老人 そうか。それでは、おまえさんにどこへ行くかとお尋ねしてもよろしいかね？

旅人 むろんかまいません。——でもわたしは知りません。わたしはやはりもの心ついたころから、ただこのように歩いて、あるところへ行こうとしているのです。その場所は前方にあるのです。わたしはながい道程を歩き、いまここにやって来たことしか覚えていません。わたしはひき続いてあちらの方へまいります、(西を指す、) 前方へ！

(少女が木のコップを用心深く捧げ出て来て、手渡す。)

旅人 (コップを受け取り、) ありがとう、娘さん。(水をふた口で飲み干し、コップを返す、)

ありがとう、娘さん。これはほんとにまれにみるご好意です。わたしはなんと感謝してよいかわかりません！

老人 そんなに感謝することはない。それはおまえさんにとってなにもよいことはないのだから。

旅人 そうです。それはわたしにとってなにもよいことはありません。でもわたしはいまとっても元気を取り戻しました。わたしはすぐに前方へまいります。ご老人、あなたはたぶんながらくここにお住まいでしょう、あなたはきっと前方がどんなところかご存じでしょう？

老人 この先？ この先は、墓じゃ。

旅人 (訝しげに、) 墓？

少女 いえ、いえ、そうじゃないわ。あそこにはとってもたくさんの野百合と野ばらがあるのよ。わたしいつも遊びに行き、それを見ているわ。

旅人 (西の方を振り返って、かすかに笑うように見える、) そのとおりです。そのあたりにはとても多くの野百合と野ばらがあります、わたしもいつも遊びに行っていたし、見に行ったことがあります。でも、あれは墓です。(老人に向かって、) ご老人、その墓場を通り過ぎた先は？

老人 通り過ぎた先？ それはわたしにはまったく解らない。わたしは行ったことがない。

旅人 ご存じない？！

少女 わたしも知らないわ。

老人 わたしがただ知っているのは南の方と、北の方と、それに東の方の、おまえさんのやって来た道だけだよ。それはわたしをもっともよく知っているところで、恐らくおまえさんにとっても、とりわけよいところかも知れない。出すぎたことを言うようだが、わたしの見るところ、おまえさんはもうこんなにへとへとに疲れておられる、やはり後戻ったがよい、おまえさんは前方へ行ったところで歩きおおせるかどうか解りかねるからの。

旅人 歩きおおせるかどうか解りかねる？・・・(考え込む、突然驚いて、) それはまずい！ わたしは行かなくてはなりません。あそこへ後戻ったところで、ひとつとして誤魔化しのないところはあります、ひとつとして地主のいないところはあります、ひとつとして追放と牢獄のないところはあります、ひとつとして追従笑いのないところはあります、ひとつとして空涙のないところはあります。わたしはそれらが憎い、わたしは後戻りはしません！

老人 そうでもあるまい。おまえさんはおまえさんのための真心からの悲しみの涙に出逢うこともあるだろうよ。

旅人 いいえ。わたしはかれらの真心からの涙を見たくありません、かれらのわたしのための悲しみは欲しくありません。

老人 それでは、おまえさんは、(首を振って、) おまえさんは行くほかあるまい。

旅人 そうです。わたしは行かなくてはなりません。ましていまでも絶えず声が前方からわたしを急き立て、わたしに呼びかけ、わたしを休息させてくれないのです。くやしいのはわたしの足がもう歩きすぎて、いちめん傷つき、多量の血が流れたことです。(片足を挙げて老人に見せる、) それで、わたしの血はもはや不足しているので、わたしは少し血を飲みたいんです。でも血はどこにあるのでしょうか？ しかしわたしは誰の血でも飲みたいとは思いません。

わたしは幾らかの水を飲んで、わたしの血を補うしかありません。道中どこでも水があつて、わたしは別になんの不足も感じませんでした。ただわたしの氣力がひどく弱ってしまいました、血のなかに水が増えすぎたためでしょう。今日はひとつの小さな水たまりさえ出遭いません、やはり少ししか路を歩かなかつたためでしょう。

老人 そうとも限るまい。陽が沈んだから、しばらく休息した方がよい、わたしのように。

旅人 でも、あの前方の声がわたしを行かせます。

老人 わたしは知っている。

旅人 あなたは知っている？ あの声をご存じなのですか？

老人 そうだ。やつは以前わたしをも呼んでいたようだ。

旅人 それはやはりいまわたしを呼んでいる声ですか？

老人 それはわたしにはまったく解らない。やつはただ何回か呼び掛けもしたが、わたしがやつをかまわなかつたので、やつももはや呼び掛けて来なくなつたし、わたしももうはっきりとは覚えていない。

旅人 うむむ、かれをかまわないって……。 (考え込むが、急に驚いて、耳を傾ける、) だめだ！ わたしはやはり行く方がよいのです。わたしは休息することはできません。くやしいのはわたしの足が傷んでしまっていることです。(歩き始めようとする。)

少女 あげるわ！ (ひときれの布を手渡す、) あなたの傷口をくるんだら。

旅人 ありがとうございます、(受け取る、) 娘さん。これはまことに……。これはまことに得がたいご好意です。これはわたしにもっとながい路を歩けるようにさせます。(割れた煉瓦に腰を下ろし、布ぎれを蹠に巻きつける、) だがいけません！ 娘さん、あなたにお返ししましょう、やはりくるむことはできません。それにこれはあまりに過ぎたご好意で、わたしは感謝の方法を持ち合わせません。

老人 おまえさんはそんなに感謝することはない、それはおまえさんにとってなにもよいことはないのだから。

旅人 そうです。これはわたしにとってなにもよいことはありません。でもわたしにとっては、この施しは最上のものです。みてください、わたしの全身のどこにこのようなものがありますか？

老人 おまえさんはそんなに真面目に考えなければよいのだよ。

旅人 そうです。でもわたしにはできません。わたしは自分があのようなになるのが怖いのです。もしわたしが誰かの施しを受け取ると、わたしはすぐにまるで秃鷹が屍をみつけたように、あたりを徘徊し、彼女の滅亡を、わたしのこの眼で見られるよう懇願するでしょう。あるいは彼女以外のあらゆるものすべての滅亡を呪う、わたし自身でさえをも、なぜならわたしこそ呪いを受けるべきものだから。しかしわたしはまだそのような力はもちません。たとえそんな力があつたとしても、わたしは彼女がそのような境遇になるのも願いません、なぜなら彼女たちがたぶんそのような境遇になるのを決して願わないでしょうから。わたしはこうするのがもっとも穏当だと考えます。(少女へ向かい、) 娘さん、あなたのこの布ぎれははなはだ結構なのですけれど、少しばかり小さすぎます、あなたにお返ししましょう。

少女 (驚きおそれて、尻込みする、) わたしもう要りません！ 持って行ってよ！

旅人 (笑うように、) ははあ、・・・わたしが手にしたからですか？  
少女 (頷いて、袋を指さす、) そのなかに入れておいて、おもちゃにしたら？  
旅人 (がっかりして後ずさる、) でもこれを体に背負って、どうして歩けましょう？・・・  
老人 おまえさんが休息しないから、背負って歩けないのだよ。——しばらく休息したら、すぐに  
なにごとにもなくなるものだ。  
旅人 そうですね、休息・・・・。(黙って考えるが、急にはっとして、耳をすます。) いえ、わ  
たしにはできません！ わたしはやはり行く方がよいのです。  
老人 おまえさんはどうしても休息したくないのかね？  
旅人 わたしは休息したいのです。  
老人 それでは、おまえさんはすぐにしばらく休息すればよい。  
旅人 でも、わたしにはできませ・・・・。  
老人 おまえさんはどうしてもなお行くのがよいと思っているのかね？  
旅人 そうです。やはり行く方がよいのです。  
老人 それでは、おまえさんはやはり行くのがよいだろう。  
旅人 (腰をちょっと伸ばして、) では、わたしはおいとまします。あなたがたに心から感謝いた  
します。(少女に向かって、) 娘さん、これをお返しします、どうぞ収めてください。  
(少女は驚きおそれて、手を引っ込め、泥造りの家のなかへ逃れようとする。)  
老人 おまえさんが持って行きなさい。もしも重すぎるのなら、いつでも墓場のなかへ投げ棄てる  
とよい。  
少女 (前へ進み出て、) あら、それはいけないわ！  
旅人 ああ、それはいけないことです。  
老人 それでは、おまえさんが野百合と野ばらの上にそれを掛けるとよい。  
少女 (手を拍いて、) はっはっ！ いいわ！  
旅人 えっ・・・・。  
(ほんのしばらくのあいだ、沈黙。)  
老人 それでは、さよなら。ご無事で。(立ちあがって、少女へ向かって、) 娘や、わたしを連れ  
て入ってくれ。ほら、陽はとっくに沈んでしまった。(身を返して戸口の方を向く。)  
旅人 ありがとうございます。あなたがたのご無事を祈っています。(徘徊し、思いに沈み、急  
に驚き、) しかしわたしにはできません！ わたしはただ行かなくてはならないのです。わ  
たしはやはり行く方がよいのでしょうか・・・・。(ただちに首をあげ、奮然と、西へ歩み去る。)  
(少女は老人を助けて泥造りの家へ入り、すぐさま戸を閉じる。旅人は荒地地のなかへ、よろ  
めくように突き進む、夜色がかれの背後を追う。)

1925年3月2日。